

## dieser と jener に就いての一考察

諏訪田 清

本稿は dieser と jener を巡ってのささやかな論考である。dieser とは一体いかなるものであるのか、そして dieser と不測不離の関係にあると思われる jener の本質は何であるのか、このことがここ数年筆者の頭を悩ませてきた。dieser および jener はドイツ人には何ら気にするところのないものなのであろう。管見するにドイツにはこの二語を詳細に論じた研究書は皆無のように思われる。またわが国にもそのような研究書は無い。このような状況でいまここによく少ない手掛かりをもとにこの二語の本質に多少なりとも近づくことができたと考える。

まず dieser と jener について誰でも知っているわかり易いものからはじめよう。次の例を見られたい:

(1) dieser Tisch

この机

(2) jenes Bild

あの絵

いずれも独和辞典からのものである。また訳文もそこに付されているものである。このような用例ならば筆者は辛ろうじて理解できるように思う。それぞれ dieser および jener の最も基本的な意味として知っているから。しかし独和辞典に見られる次のような訳には首をかしげざるを得ないのである:

(3) diese Dame hier

ここにいるこの婦人

(4) jenes Paket dort

あそこのあの包み

われわれはそもそも「ここにいるこの婦人」、或いは、「あそこのあの包み」などと言うであろうか。(3) (4) はいずれも文の一部であり、全体はつぎのようになっている:

(5) Kennen Sie diese Dame hier?

あなたはここにいるこの御婦人を御存知ですか。

(6) Wem gehört jenes Paket dort?

あそこのあの包みは誰のものか。

文全体を示すと一層はっきりしてくる。われわれは邦訳に見られるような言い方をまずしない。(5) ならば「あなたはこの方をご存じですか」と言うであろうし、(6) ならば「あの(または、あそこの)包みは誰のものか」と言うであろう。当のドイツ人もかかる感じで上の文を使用しているのではあるまいか。更に次の例を見られたい:

(7) Hier sind zwei Wege. Dieser führt zum Park, jener zur Kirche.

ここには道が二つあってこちらのは公園へあちらのは教会へ通じている。

邦訳に見られる言い方をわれわれは絶対にしない、そのように断言できる<sup>1)</sup>。ドイツ語を解せない人にこの文を見せたら例えば「ここに道が二つある。一つは公園へ、もう一つは教会へ通じている」とでも直すであろう。

概観しただけでも *dieser* と *jener* には実に奇妙な訳が施されている。更に次の例を見られたい:

(8) dieses neue Auto dort

あそこにある [その] 自動車

邦訳から判断する限り、また(4)をも勘案すると、ここでは *dieser* ではなく *jener* のほうが相応しいのではないかと思えてくる。これは畢竟 *dieser* と *jener* に与えられた訳語に問題があるのではないのか。換言すれば、*dieser* は

果たして本当に「この」、jener は「あの」で良いのであろうか、この点が疑わしくなってくる。dieser と jener に関して筆者が悩まされてきたものとは、極言すれば、dieser と jener の言わば原点とは何か、ということであり、それが解決できないでいたのである。

わが国には dieser と jener を論じた詳細な研究書は無いと言った。ただしこの二語を素描しているものはある。例えば澁田一雄氏は jener に関してつぎのように述べている<sup>3)</sup>：

ちょっと余談になりますが、日本では dieser と対応して jener がよく持ち出されます。これはどうも英語の *this, that* から類推した誤解のように思われます。dieser が *this* だと考えるのはいいとして、jener をふつうの「あの…」とか「あれ」とか考えるのは大変まずいと思います。「あの人」を jener Mann などとは言いません、der Mann da とか、指示詞で der とか言うでしょう。jener が使われるのはたいてい副文の代表者としてです：

Ich will hier versuchen, eine kurze Geschichte jener ewigen Sehnsucht nach Einheit des Gefühls, Wollens, Denkens und Lebens zu geben, die in zweitausend Jahren jenes wunderbare Gemeinschaftsgebilde geschaffen hat, das wir stolz europäische Kultur nennen.

ここでわたしが述べたいと思うのは、2千年の歳月の間に、我々が誇りを以ってヨーロッパ文化と呼んでいたあのすばらしい共同形成物を創り上げてきたところの、感情・意欲・思考・生活がひとつになることを求めるあの永遠の憧憬の短い歴史である。

…。 jener という語はこのように「…するところのかの」というような場合の「かの」であり「あの」であって、「あの本を取ってくれ」というような「あの」ではないと思ってください。

澁田氏は、「あの本を取ってくれ」という場合の「あの本」は jenes Buch ではない、と言う。これはその通りであろう。そのような場合には澁田氏の注釈の通り das Buch da とするか、或いは、dieses Buch da とか言うであろう。似た例がある研究書に載っている<sup>3)</sup>：

(9) Dieses Kind da ist die Tochter unseres Lehrers.

あの子供は私たちの先生のお嬢さんです。

dieses Kind da を「あの子供」と訳した根拠については後述するとして、では淵田氏の注釈は完璧なものであり、瑕瑾は無いのかということになると、必ずしもそうは言えまい。(2) の jenes Bild は「かの絵」という意の「あの絵」であると同時に、また隔たりのあることを感じさせる「あの絵」と解釈できるのではないのか。(4) 即ち (6) の jenes Paket dort でも「包み」は同じように隔たりに感じさせるところにあるのではないのか。

淵田氏の注釈には誤解を生む個所があるのである。それは「jener をふつうの『あの…』とか『あれ』とか考えるのは大変まずいと思います」という所である。淵田氏は「かの」という意の「あの」を除くと「あの」には「ふつうの『あの』」しか無いと考えているようだ。ここからおそらく jener は主として副文の代表者として使われるという注釈が導きだされたのであろう。しかし jener には隔たりに感じさせる「あの」がまだ存在するように思えてしかたがないのである。

dieser は「この」と訳せるであろう。しかしまた「あの」とも訳せる。他方 jener も「あの」という意を有しながら、「この」とも訳せるのである。次の文を見られたい：

(10) Ich kenne seine Familie seit langem und schätze die Denkungsart jener Familie.

私は彼の家族とは前々からの知り合いであの方たちの物の考えかたを高く評価している。

これはある独和辞典からのものである。この辞典はここで用いられている jener に対して「dieser と特に変わらぬ用い方で」という注釈を施している。確かにこの例では jener は dieser の意で使われていると思える。訳もその点を考慮して「私は彼の家族とは前々からの知り合いであの方たちの物の考え方を高く評価している」としたほうがよいのではなからうか。

dieser と jener は必ずしも峻別されえない。あるときには両者はその意が非常に接近するのである。

一般にある事柄がわからなくなったときには原点に立ち戻ってみることが賢明である。dieser と jener においてもそれは例外ではあるまい。まずこの二語がどのように定義されているか調べてみよう。ある独和辞典（以下『A 辞典』と略す）は次のように定義している：

dieser 一般に空間的・時間的又は心理的に比較的近いもの、或いはすぐ前に挙げられたものを指す。

jener 一般に空間的・時間的に比較的遠いもの、或いは先に挙げたものを指す。

この定義を一読して dieser は比較的近いもの、jener は比較的遠いものを指すということとその特徴としていることに気づく。何ら目新しいことではないという答えが返ってきそうだが、決してそんなことはない。ここのところの考察がおろそかであったがために dieser と jener において誤った、或いは、誤解を招く記述が行われていたと考えたい。

最初に dieser について考えてみよう。『A 辞典』では dieser は「比較的近いものを指す」となっている。他の独和辞典がどのように扱っているか調べてみると、二つの辞典が簡単ながらつぎのように dieser の定義を行っている：

『B 辞典』 空間的・時間的に近くにあるものを指す。

『C 辞典』 近くにあるものを強く指示する。

今度は独々辞典の記述に目を向けてみよう。ほとんどすべての辞典が大同小異である。ただ Kempcke の Handwörterbuch der deutschen Sprache（以下 Kempcke と略す）は多少異なっている。Kempcke は dieser を次のように定義している：

dieser der, die, das の機能をもつ。但し、より強く空間的に、或いは、想念の上で話者に近い人、または、近いものを指す。

下線部に注目していただきたい。Kempcke は「話者」(der Sprecher) という言葉をいれている<sup>4)</sup>。原文は次のようになっている：

*dieser weist in der Funktion von der, die, das, jedoch ausdrücklicher,*

*auf eine dem Sprecher räumlich od. in der Vorstellung nahe Person od. Sache hin.*

「話者に近い人、または、近いもの」と Kempcke が言うとき、それは「話者に」が Dativ であることからわかるように「話者が近くに感ずる人、または、もの」ということである。決して「話者の近くにいる人、または、近くにあるもの」という意ではない。

dieser を Kempcke に倣ってこのようなものと考えよう。人は視界に入るものを近くにも、或いは、遠くにも感ずることができる。また過去の出来事でもそれを同じように近くにも、或いは、遠くにも感ずることができる。dieser はこのうち話者が近くに感ずる人、または、ものを指すためのものなのである。そして jener は話者が遠くに感ずる人、または、ものを指すためのものなのである。先に 淵田氏の注釈を紹介したが、「ふつうの『あの……』とはわれわれがある人、または、あるものを近くに感ずるときのことを 淵田氏は言っているのである。

三つの独和辞典による dieser の定義もおそらくいま述べてきたことをいっているのであろう。しかし正確さに欠けていることは否めまい。そのために冒頭に挙げたわれわれがふつう言わないよう訳を施すことになったと考える。ここでそういった疑問を抱かざるを得ないような訳が付されているものを含めていままで挙げた例を再検討してみよう。まず (1) である：

### (1) dieser Tisch

ここでは話者が彼の近くにあると考えている机のことが問題となっている。句例であるために詳しい状況はわかりかねるが、話者が目の前にある机を指して dieser Tisch と言う場合が一つの状況として考えられよう。これと非常に似た例が Duden の Das Große Wörterbuch der deutschen Sprache (以下 Der große Duden と略す) に載っている：

(11) Dieser Platz [hier] ist frei.

この席は空いています。

例えばレストランでボーイが空いている席の所まで客を案内して言う言葉と

考えれば宜しい。

ここで次のことを確認しておこう。それは、*dieser* は話者が近くにいると感ずる人、または、近くにあると感ずるものを、*Kempcke* と *Der große Duden* の二辞典が指摘するように、「強く」(*ausdrücklich, nachdrücklich*) 指す機能を持っている、ということである。従って当の人のいる場所、或いは、当のもののある位置は *dieser* のみで聞き手の了解するところとなるはずであるが、更に念を入れてその場所なり位置を明確に示そうとするときには (11) のように括弧に入っている *hier* などが附置される<sup>5)</sup>。

今度は (5) に就いて考えてみよう：

(5) *Kennen Sie diese Dame hier?*

*diese* によって女性は話者が彼の近くにいると考えている人であることが聞き手に直ちにわかる。そして附置されている *hier* によってその女性が例えば話者の隣にいることが推測される<sup>6)</sup>。詳しい状況は定かではないが、ある人に対してその女性を紹介しようとしていることが一つの場合として考えられよう。次に (8) の考察に移ろう：

(8) *dieses neue Auto dort*

ここにおいても *dieses* によって新しい車は話者が彼の近くにあると思っているものであることが分かる。その場所がどこであるか、何の説明もなければ話者の目の前ということになるだろうが、ここでは *dort* が附置されていることによって当の新車は話者からある距離を隔てた所にあることになる。但し一言加えると、この例に施された「あそこにある [その] 新しい車」という訳は良いとは言えまい。関口存男氏は *dort* に関して「*dort* は自分から相当隔たりのある時に用いる」と言い<sup>7)</sup>、独和辞典にもそのような例が挙げられているが、そうとも限らないようである。例えば次の例を見られたい：

(12) *Elisabeth faßte Reinhard's Hand. „Mir graut!“ sagte sie.*

„Nein,“ sagte Reinhard, „das muß es nicht. Hier ist es prächtig. Setz dich dort in den Schatten zwischen die Kräuter. Laß uns eine Weile ausruhen; wir finden die andern schon.“

[Storm : Immensee]

エリーザベトはラインハルトの手をにぎった。「わたしこわいわ!」  
「こわかないよ」とラインハルトは言った。「こわいことなんかある  
もんか。ここはすてきだなあ。まあ、その木かげの草のなかに坐  
りたまえ。少し休もうよ。きっとほかの連中にもあえるよ」

[関 泰祐訳]

dort はここでは「(話者からかなり近い) そこにて」という意である。dort  
が相当の隔たりを意味すると考えるのは誤りではないのか<sup>9)</sup>。更に次の例を見  
られたい:

- (13) Sobald die Uhr zehn schlug, suchte die Mutter durch leise Zu-  
sprache den Vater zu wecken und dann zu überreden, ins Bett zu  
gehen,---. Erst als ihn die Frauen (=die Mutter und ihre Tochter)  
unter den Achseln faßten, schlug er die Augen auf,---. Und auf  
die beiden Frauen gestützt, erhob er sich, umständlich, als sei  
er für sich selbst die größte Last, ließ sich von den Frauen bis  
zur Türe führen, winkte ihnen dort ab und ging nun selbständig  
weiter---

[Kafka: Die Verwandlung]

時計が十時を打つのを待ちかまえて、母は小さい声で呼びかけて、  
父の目を覚まさせようと試み、それから早くベッドへ行くように説  
得しにかかるのであった。〈中略〉けっきょく、女たちに両方の肩  
の下を引っ掴まれて、やっとのことで目をあけ、〈中略〉二人の女  
に左右から支えられて、まるで自分の体が自分でひじょうな重荷で  
あるかのように、ぎょうさんぶって起きあがり、女たちに戸口のど  
ころまで引き立てられると、そのへんで合い図をして女たちを押し  
とどめ、そこからは一人で歩いていくのだった。

[中井正文訳]

dort は作者が直前に示した「ドアの所で」を指している。

dort はいま提示した意であるとしよう。そうすればこの語は話者が近いと  
感じていると思う人、または、ものを指す dieser と併用されることの説明が



つくではないか。(8)は「その新しい自動車」と訳せるであろう。

最後に(9)を検討することにしよう:

(9) Dieses Kind da ist die Tochter unseres Lehrers.

ここでも dieses によって子供は話者にとって近くに感じられていることが分かる。単文であるために詳しいことはわかりかねるが、ひょっとすると子供は話者から相当離れた所にいるかも知れない。しかし話者は子供を彼の近くに感じるのである。それをわれわれは dieser のみならず、da によっても知ることができる。da とは関口氏によると「空間的にわれわれに接近している」と否とにかかわらず、われわれの意識の間近くに迫っている時に用いるのである」ということになる<sup>9)</sup>。先の淵田氏の注釈の中で「ふつうの『あの…』」の意の「あの人」は der Mann da となっていたが、「あの人」を淵田氏は、例えばある人が突然視界に入ってきたときにわれわれが言う「あの人」という意で用いているのである。その場合「あの人」が「われわれの意識の間近くに迫っている」ことは言うまでもないことである。

さて、独和辞典に見られる次のような例においても dieser は話者が近くに感ずる人、または、ものを指すということをはっきりと窺うことができる:

(14) Diese Esel!

あのばかめ。

(15) Das alles hat diese Anna verraten.

[あの] アンナが何もかもばらしたんだ。

(16) Diese Elke hat eine Eins im Rechnen bekommen.

あのエルケが算数で1(最高の評点)をもらった。

(14)(15)の diese は非難・軽蔑、(16)の diese は賞賛の意を含んでいとされるが<sup>10)</sup>、それに異論はあるまい。ある人を非難・軽蔑したり、賞賛するときにはその当人がわれわれの眼前に、或いは、脳裏にありありと浮かんでくる。彼は近くにいる、とわれわれは思うのである。その際に dieser が活躍するのは当然であろう<sup>11)</sup>。

但し、かかる dieser をいずれの独和辞典も「心理的」観点からとらえているのには賛成しかねる(『A 辞典』が「心理的」という言葉を用いていること

には既に触れたが、『B 辞典』『C 辞典』もあらたに項目を設けて「心理的」という言葉を用いている)。dieser は「空間的」にであれ、「時間的」にであれ、或いは、その他の観点からであれ、そもそも人が自分の近くに感ずる人、ものを指すためのものなのである。自分の近くに感ずるということが「心理的に近い」ということなのではあるまいか。かるが故に「心理的」観点を導入して dieser を論ずることは tautologisch (余分な) ことなのである。こういう観点からではなく、ある人、あるものが自分に近いと感ずるという点だけから dieser を捉えたほうが宜しい。そしてこの観点とは da に就いての関口氏の注釈がそのまま妥当するところのものである。dieser は次のように定義することができよう：

dieser は空間的にわれわれに接近していると否とにかかわらず、われわれの意識の間近かに迫っているときに用いる。

jener の考察に移ろう。dieser の場合と同じように巷間言われている jener の定義にも修正を加える必要があると考えられる。『A』『B』『C』の三つの独和辞典では jener は次のように定義されている（重複をいとわず『A 辞典』による jener の定義も再度掲げる）：

- 『A』 一般に空間的・時間的に比較的遠いもの、或いは先に挙げたものを指す。
- 『B』 dieser と対照的に空間的・時間的に遠くにあるものを指す。
- 『C』 dieser と対照的に。

この定義を一見して直ちに考えられる修正は、jener は話者が遠くに感じられる人、または、ものを指す、というようにすることである。ではどうして人が、または、ものが遠くに感じられるのであろうか。それはわれわれが別のある人、または、ものを近くに感じていることによるのではないのか。果たして Kempcke も jener を次のように定義している：

jener は話者にとって空間的に、或いは、想念の中で遠くにいる人、または、遠くにあるものを指す。主として近くにいるほうの人、または、近くにあるほうのものを指す先行する dieser がその前提になっている。

前半部に修正が加えられねばならないことは言うまでもない。にもかかわらずここで Kempcke を紹介したのは理由がある。jener が dieser を前提としているということは jener を論ずるに際して欠くことができない重要な点であると思われるにもかかわらず、Kempcke を除いてどの辞典も残念ながらこの点に触れていないのである。

dieser を視野に入れながら jener を検討してみよう。最初は次の例である：

(17) Dieses Haus hier gehört mir und jenes dort meinem Vater.

この家は私のもので、あちらは父のものです。

これはある文法書からのものである<sup>12)</sup>。jener は dieser を前提として成立する、このことがここでは、dieses の出現によって、はっきりと見てとれる。そして jener dort はしばしば dieser hier を伴うのである。そのことは管見するにどの文法書にも扱われている。例えば橋本文夫氏もこの形に言及している。とすれば独和辞典の一つくらいは jener が dieser を前提とするということに触れてもいいのではあるまいか。それはさて置き、この (17) にて jenes dort で以て指されている家は遠くに感じられるであろうか。dort は先に検討したようにそれほど遠くにあるものではなく、寧ろ近くにあるものを指すときに用いる。すると問題の家は近くに、厳密に言えば dieses Haus hier よりほんの少し先の遠方にあるのではないかと思われてくる。

このことが (17) のみならず jener 一般に妥当しうるとしよう。即ち、jener は dieser によって指されたのより少し先にある人、或いは、ものを指す、と考えるのである。すると jener が dieser と同様に dort と併用されることの説明がつくではないか。ここで先に淵田氏の注釈を論じていた際に触れた jener は「隔たりを感じさせる」人、または、ものを指すものであるという言葉を出していただきたい。jener による隔たりは dieser が前提となって始めて成立すると考えることができるではないか。

こうなると巷間言われている jener の定義はもはやその有効性を失ったと言える。またこの定義に対して一時的に加えた「jener は話者に遠くに感じられる人、または、ものを指す」という修正は文字通り暫定的なものに過ぎなくなる。この修正に新たな修正を施さなくてはならない。取りあえず次のように修正しておこう：

jener は先行する dieser を前提とし、話者に隔たりを感じさせるものを指す。

jener をこのようなものだと考えて (6) に戻ってみよう：

(6) Wem gehört jenes Paket dort?

先行する dieses Paket hier が前提となっていると考えればこの文は容易に理解することができる。おそらく dieses Paket hier のほうはその所有者が判明したのであろう。誰でも近い所にあると思うものを先に問題とするであろうから。それで今度は dieses Paket hier から隔たりのある jenes Paket dort が誰のものか尋ねているのである<sup>13)</sup>。意味は既に示したとおりであり、「その包みは誰のものですか」ということになる。

いま筆者は「それで今度は dieses Paket hier から隔たりのある jenes Paket dort が誰のものか尋ねているのである」と言った。このことは話者の視点が移動したことにほかならない。jener が dieser を前提するという意味は話者の視点の移動ということだったのである。視点の移動によって今度は jener の指すところのものが話者の関心に近くなるのは必定である。jener は、dieser から視点が移動することによって、dieser と同様に「空間的にわれわれに接近していると否とにかかわらず、われわれの意識の間近かに迫っているときに用いる」ということになる。

jener がかかるものであるということはいま扱った (6) のみならず、先の (17) においても当然言える。dieses Haus hier から jenes (Haus) dort へ視点が移動することによって始めて jenes (Haus) dort が論じられるということになるのである。

ここで仮に (6) で dort がない次の文を考えてみよう：

(18) Wem gehört jenes Paket?

dieser と同様に jener もまたその指すところのものの位置をはっきりと示すためには dort などの副詞が附置されることになる<sup>14)</sup>。ところが附置詞のないこの (18) になると jener が果たして空間的な隔たりを感じさせるものなの

か、或いは、それよりはむしろ淵田氏の言う副文の代表者およびそのヴァリエーションとみなしたほうがよいのかわからなくなる。後者の場合には「あの例の包みは誰のものなんですか」という意味になる。勿論この意味のときに jener が dieser と変わらずまさしく「われわれの意識の間近かに迫っている」ということについては論をまたない。

では次の文を見られたい:

(19) Jenen Tag werde ich nie vergessen.

あの日のことは決して忘れないだろう。

これはある独和辞典からのものである。この(19)とDudenのBedeutungswörterbuch(以下Bedeutungswörterbuchと略す)に載っている次の文を比較してみよう:

(20) Dieses Abends erinnere ich mich noch.

あの晩のことはいまでも鮮明に記憶に残っている。

この二つの文が並べられたとき dieser と jener の間には相違はなく、dieser と jener は共に「われわれの意識の間近かに迫っているときに用いる」ものであるという論が間違っていないことを確認することができる。ただ jener は dieser を前提とすることから、(19)は「今日という日」を話者が考えてその結果 Jenen Tag となったのだと推量できよう。

今度は Der große Duden に載っている次の文を見られたい:

(21) Dieses [Buch] kostet 10 Mark, jenes ist wesentlich teurer.

こちらの本は10マルクです。他方そちらの本はこちらよりはるかに値段のはるものです。

jener に対する Der große Duden の注釈は注目に値するものである。この辞典は jener に対して:

jener は話者から空間的に離れている人、或いは、ものを指す。

と定義をしながら、jener の語義は:

dieser [dort, da, o.ä.]

であると簡単に片づけているのである。この態度は(21)においても同様に、jenes は単に dieses dort であるとしているにすぎない。しかし Der große Duden にとって、否、ドイツ人にとってこの定義・語義は何ら不思議なものではなく、むしろ極めて当然なものなのであろう。他方われわれもいまや Der große Duden, 否、ドイツ人と同じ立場に立つことができる。jener は dieser と同じく「われわれの意識の間近かに迫っているときに用いる」という結論を得ているからだ。(21)は Der große Duden と同様に簡単に理解することができる。Dieses [Buch] は話者の手元にある本である。彼は先ずこの本の価格を示す。次にその隣にある本 jenes [Buch] に彼は視点を移動させる。それと同時にその本が彼の意識に近くなる。今度はその本が彼には dieses [Buch] となってくるのである。

次の例も同様に考えることができる:

(22) Die beiden Anrichten sehen gleich aus, aber diese (hier) ist alt und jene (dort) neu.

この二つの食器棚は同じようにみえます。しかし、こちらは古いもので、そちらは新品です。

これは Oxford-Harrap の Standard German-English Dictionary (以下 Oxford と略す) に載っているものである。Die beiden Anrichten とあるので二つの食器棚は並んでいることがわかる。話者は先ず手前にある古いほうの食器棚の説明をし、次にその先にある新しいほうの食器棚の説明に移る。これからは彼にはこの新しい食器棚しか頭がない。その棚は彼には実は diese dort なのだ。

尚、hier と dort が括弧の中に入っている。しかし二つの食器棚の並んでいることがあらかじめ提示されているのであるから、これらの語は別に附置されるに及ぶまい。但し、附置すれば食器棚の位置はこのうえなく正確に示されることになる。

jener がこのように dieser で以て置き換えられるとすると、われわれ日本

人には例えば (21) が次のようであったらより分かりやすいのではないだろうか:

(23) Dieses [Buch] hier kostet 10 Mark, dieses dort ist wesentlich teurer.

しかしドイツ人にはこの文は理解できないであろう。ドイツ人にとって jener はあくまで dieser が前提となっているのである。彼らには jener は視点の移動という機能をもった dieser なのである。

dieser と jener に対するドイツ人の意識がかかるものであるとすると、つぎの例もわけなく理解することができる:

(24) Peter hat zwei Bücher gekauft. Dieses hat er schon gelesen, jenes noch nicht.

ペーターは本を2冊買った。一冊はすでに読了したが、もう一冊はまだ読んでいない。

これは Duden の Grammatik (1984) (以下D-G-1984と略す) から採録したものである。この例は次のように解釈される。話者の脳裏にペーターの買った二冊の本がありありと浮かんでいるのである。そしてその二冊の本は彼の頭の中で並んでいる。彼には読了されたほうの本が彼の「意識の間近かに迫って」いた。その本が、同じく関口氏の言を借りれば、彼の「意識と関心に近い」ものであった<sup>19)</sup>。彼は先ず dieser でこの本のこと言及し、その説明を終えると、次いでまだ読まれていないほうの本へ jener によって言わば視点を移動するのである。

ここで注意すべきことはD-G-1984は dieser と jener を論ずるにあたってこの文を最初に扱っているということである。ドイツ人にとって dieser と jener を論ずる際にはおそらくこの(24)のような例をその対象としたほうがよいであろう。二冊の本が彼の頭の中で並んでいるとすれば、(22)のように考えて、先ず読了された本が彼の意識に近いものとして指され、次に読まれていない本が彼の意識に浮かんでくるとみなすこともできるであろう。では何故に読了された本が最初に話者の「意識の間近かに迫って」くるのであろうか、逆のことは生じないのであろうか、という問を投げかけられたとしたら

何と答えることができるであろうか。それに対しては次のようにしか言うことができまい、「未だ読まれていないほうの本が話者の意識に近いものとして最初に浮かんで来るはずがない」と。

このように(24)の *dieses* と *jenes* はもはや空間的な観点からは捉えきれない。二冊のどちらが空間的に近くて、どちらが遠いなどということは言えないのである。*dieses* と *jenes* は共に話者の意識に近いものを指している、そう解釈したほうが(24)は理解できる。この解釈を更に徹底すると課題とした(7)は解決できるであろう：

(7) Hier sind zwei Wege. Dieser führt zum Park, jener zur Kirche.

これはある人が地図を前にしてそこに載っている二つの道を説明しているものと考えたとわかりやすい。彼は「意識と関心に近い」公園への道から説明に入る。次いで教会へ通ずる道の説明に移る。ここで注意しなければならないのは、彼が公園へ至る道を最初に採り上げたのは全くの偶然と考えなければならないということである。(24)においては、既に触れたように、読了したほうの本が話者には先ず近くに感じられる。しかしここでは地図を前にしてのことである。どちらの道が先ず説明者の「意識と関心に近い」ものであるかなどということを他の人が推し量ることは不可能である<sup>16)</sup>。訳出に際してもこの偶然性ということを考慮して：

(指示棒で指しながら)ここに道が二つある。こちらは公園へ、そしてこちらは教会へ通じている。

としたらいかがであろうか<sup>17)</sup>。

この(7)の *dieser* と *jener* にその本来の、換言すれば、その最も純粋な姿を見ることができる。長い道のりを辿ってきたが、ここに今、共に同等の資格で「意識と関心に近い」人、または、ものを指す、これが *dieser* と *jener* の本質であると確認することができる。独々辞典、従ってそれを参考にして作られている独和辞典のいずれを問わず、*dieser* と *jener* を空間的・時間的その他の観点から捉えているが、この観点では(24)は多少説明できるとしても、(25)になるともはや完全にお手上げである。その観点は言わば副次的なものにすぎなかったのである。例えば次の例を見られたい：



(25) Mond und Sonne leuchten am Himmel, diese bei Tag, jener bei Nacht.

月と太陽は空に輝く、後者は昼に、前者は夜に。

これはある独和辞典からのものである。このような例はどんな文法書・参考書でも扱われている。そしてそこでは dieser は「前者」、jener は「後者」を指す、と説明されている<sup>18)</sup>。ではこうした dieser と jener が果たして空間的観点のみで、或いは、時間的観点のみで律しきれるであろうか。この例では diese と jener の指しているものは空間的にも、また、時間的にも捉えることができるように思われる。更にこの二つが複合した観点からも捉えることができるように思われる。このことは、しかし、そういった観点では捉えきれないことを意味しているのである。

ある事柄をいろいろな観点から解釈できるとすると、その事柄は多様性を有し、それゆえにそういった多様な解釈を許すのだと見なされがちだ。しかしこのことはそういったいろいろな解釈がどれも不十分であることを示しているということのなによりの証左なのである。そのような解釈を包括するある解釈、それが当の事柄を統べていると考えなくてはならない。dieser と jener を空間的・時間的その他の観点から捉えようとしても捉えきれない、この事実は dieser と jener の定義に際してこうした観点を導入しては駄目だということを見せてくれているのである。dieser と jener はそれらを包括するもっと高い次元で、次のように定義されるべきなのである：

dieser と jener は共に「意識と関心に近い」ものを指す<sup>19)</sup>。

これで以て次の例の dieser と jener は容易に首肯しうるであろう：

(26) Ein solcher Vorwurf läßt mich ungekränkt:

Ein Mann, der recht zu wirken denkt,

Muß auf das beste Werkzeug halten.

Bedenkt, ihr habet weiches Holz zu spalten,

Und seht nur hin, für wen Ihr schreibt!

Wenn diesen Langweile treibt,

Kommt jener satt vom übertischten Mahle,  
Und, was Allerschlimmste bleibt,  
Gar mancher kommt vom Lesen der Journale.

[Goethe: Faust]

そんな悪口をいわれたって、平気なものです。  
ひとかどの仕事をやろうと思う男は、  
一番いい道具を選ぶことが大切だ。  
考えてごらんなさい、あなたは軟かな木を割る役目なんですよ。  
いったいどんな相手のために書いてやるんだか、見てください。  
ある見物は、退屈まぎれにやってくるかと思うと、  
またあるものは、たらふくご馳走になった腹ごなしにやってくる。  
いちばんひどいものになると、新聞をよみ飽きた挙句に  
やってくるなんて手合いも少なくない。

[相良守峯訳]

- (27) Der 8. Mai ist für uns kein Tag zum Feiern. Die Menschen, die ihn bewußt erlebt haben, denken an ganz persönliche und damit ganz unterschiedliche Erfahrungen zurück. Der eine kehrte heim, der andere wurde heimatlos. Dieser wurde befreit, für jenen begann die Gefangenschaft. Viele waren einfach nur dankbar dafür, daß Bombennächte vorüber und sie mit dem Leben davongekommen waren. Andere empfanden Schmerz über die vollständige Niederlage des eigenen Vaterlandes. Verbittert standen Deutsche vor zerrissenen Illusionen, dankbar [waren] andere Deutsche für den geschenkten neuen Anfang.

[Richard von Weizsäcker]

われわれドイツ人にとっての5月8日は、祝賀すべき日ではありません。この日を迎えたとき、もの心がついていた人びとは、きわめて個人的な、従ってきわめてさまざまな経験をしたことを思い出されるでしょう。故郷へ帰った人もいれば、故郷を喪った人もいました。解放された人もいれば、捕囚の身になった人もいました。夜ごとの爆撃と不安が去り、生き延びたことをひたすらありがたく思った多くの人もいれば、自らの祖国が完膚ないまでに打ち破られたことに胸を痛めた人もいました。幻想が粉々になって胸塞がる想いの

ドイツ人もいれば、新たな出発の機会を与えられたのを喜んでいる  
ドイツ人もいました。

[永井清彦訳]

二つの例の *dieser* と *jener* は何れも「意識と関心に近い」ものを指す、ということから直ちに説明されうる。(26)においては観劇にやってきた人たちを二分して、その一方が *dieser*、他方が *jener* で、(27)においては解放された人たちが *dieser*、捕囚の身となった人たちが *jener* で指されている。

*jener* は *dieser* を前提としてその存在を主張することからこの両者はペアで扱われることが多いのはある意味で当然のことと言えよう。それに対応してこの二語の指すものも(7)では二つの道、(17)では二軒の家、(22)では二冊の本、(24)も(22)と同様に二冊の本、(26)では二分された観劇客、(27)では解放された人と捕囚の身となった人、というように対となっている。

最後に次の例を見られたい:

(28) *dieser und jener*

いろいろな人

(29) *dieses und jenes*

いろいろなこと

辞典、文法書の何れを問わず、扱われている成句である。成句となった所以は *dieser* と *jener* がペアであることからほかなるまい。*dieser* があるものを指せば、対である *jener* はそれに対応するものを指す、*dieser* が次にまた別のあるものを指せば、*jener* も対である別のあるものを指す、というように考えられるから。しかし *dieser* が次から次へといろいろなものを指し、それに対応して *jener* も同じように次から次へと別のものを指すということになれば、中身は結局どうということもないものになってしまう<sup>20)</sup>。かくして這般の意味が確定したと思われる。

以上 *dieser* と *jener* に就いて縷々述べてきた。結論は次のように言えるであろう:

*dieser* と *jener* は共に話者の「意識と関心」に近いものを指す。もし *dieser* と *jener* がペアで現れるときには、先ず *dieser* が最初に現れて

対となっているものの一方を指し、次いで *jener* が登場して残ったほうのものを指す<sup>21)</sup>。

この結論に立ったとき、*dieser* は従来言われてきたように「この」であり、また、「あの」という訳語を当てることができる。*jener* もまた *dieser* と同様に「この」と「あの」という訳語を当てることができるが、更に「その」をも加える必要がある<sup>22)</sup>。

(1991年10月11日)

〔注〕

1) 他の独和辞典にも同様の訳が見られる：

(1) Hier sind zwei Wege: dieser führt auf den Berg, jener nach der Stadt.

ここに二つの道がある。これは山へ、あれは町へ通じている。

(2) Hier sind zwei Wege; dieser führt zum Schloß, jener zur Stadt.ここに二つの道がある、こちらの道は城に通じ、あちらは町へ通じている。2) 澁田一雄(1978)：50-51頁

3) Schulz・Griesbach(1982)：S.173

4) Kempckeの言わば「親辞典」に当たる Klappenbach/Steinitzの Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache(以下 Klappenbach/Steinitzと略す)にも「話者」(der Sprecher)という言葉が見られる。

5) Schulz・Griesbachも同じことを言っている。Schulz・Griesbach(1982)：S.173

6) 次の例においては *hier* が附置されている：

(1) Ich möchte dieses Buch hier.

この本が欲しいのですが。

(2) Wem gehört dieses Paket hier?

この包みは誰のものですか。

(3) Welches Zimmer gefällt Ihnen? Dieses hier.

どちらの部屋がお気に召されましたか。こちらのです。

(1)はKempcke、(2)は Klappenbach/Steinitz、(3)は独和辞典からのものである。(1)(2)においては何れも本、或いは、包みが話者の手の中にあると思われる。この二つの場合には *hier* によって当該のものゝ位置が正確に示されて

いる。他方(3)においては話者が指でもって指している部屋が問題になっていると思われる。この場合には本文の(11)と同じように hier は無くても意は通ずるはずである(Agricola の Wöter und Wendungen でも Dieses/Dies [da, dort, hier] ist mein Zimmer. と da, dort, hier は括弧の中に入っている)。にもかかわらず、このように hier が附置される。hier によって正確な位置をより明確に伝えたいということなのであろう。しかしこの事実は dieser が単に話者にとって近くに感ぜられるものを指す機能しか持ち合わせていないということのなよりの証左となる。

- 7) 関口存男(1936): 374頁。及び同じく関口存男(1971): 7頁。しかし関口氏は何れにおいてもその直後に「dort は、空間的か心理的か、いずれかの意味において多少の隔りがある時に用いる」としている。この場合の「多少」が多いことを意味するのか、或いは、少ないことを意味するのか曖昧である。
- 8) 訳者の関氏は dort をこのように「そのの」と訳しているが、「あそのの」と訳されている翻訳のほうが多いようだ。
- 9) 関口存男(1936): 374頁。及び同じく関口存男(1971): 7頁。尚、関口氏は da に関して次のような興味深いことを述べている<sup>1)</sup>:

近頃の哲學者ですが、Heidegger と云ふ一寸變った人がゐます。その主著 Sein und Zeit (實在と時間)は語法と思想の難解なのを以て有名です。それは、荒っぽく云ふと、da と云ふ一字のもってゐる内容を繰りひろげて其処から「人生とは何ぞや」と云ふ問に一つの解決を與へたもので、言語と思想との關係を考へるには好個の材料です。

また noch を論ずるに際しても関口氏はハイデッガーの論を援用している。例えば:

Das Haus ist noch vor kurzem gebaut worden.

その家は『つい最近』建てられた『ばかりだ』。

という文の noch について<sup>2)</sup>:

「その過去が『最近』であり、意識と關心とに『近い』ことを意味するのです」と関口氏は言い、その根拠をハイデッガーに依って次のように述べている:

「意識と關心」に近いと云ったのには、一寸理由があります。日本語の『つい…』といふ言葉の論理機構を考へれば自然わかることですが、一たい近いとか遠いとか云ふ判断は、『科学的』に考へると凡て相對的な問題になって來ます。何故相對的になって來るか? ——これは哲學上の大問題ですが、Heidegger の哲學のある今日に於ては、少くとも次に述べるやうな Kritik が成立します。

(私は、Heidegger の功績の最も顯著なるものは、科學的であった哲學を『存在學的』(ontologisch)な哲學にしたのと、それから、もう一つは、それが Kant 以後の一大 Kritik である點にあると信じてゐます。)それは即ち、Heidegger の所謂 Sorgestruktur (關心構造)の顯れであるところのものを、即 Zeitlichkeit から發してゐるものを、科學的概念を以て律しようとする、すべてが(當然の酬いとして)『相對的』になって來る。『近い』『遠い』は Zeit ではなくて Zeitlichkeit を云ひ表はす概念です。それを Zeit (數學的概念、或ひは Bergson のいはゆる空間單位的に考へた、空間的思惟から生まれた何分とか何秒とかいふ「何」です。)で考へようとする、お門違ひになって、近い遠いは結局『相對的だ』といふことになって來る。宇宙全體だって、物質の最後の問題だって、これは結局 Heidegger の所謂 räumliches Da 即ち Sorgestruktur から來る概念(現象)なのだから、それを自然科學で律しようとしたから、當然相對性を帶びて來るのは初めからきまっています。

補注1) 関口存男(1936): 375頁

補注2) 関口存男(1976): 222-223頁

- 10) (16)の例について一言。この訳では稱賛の意を汲み取ることができない恐れがある。怠け者のエルケが意外なことに算数で「1」を貰った、という意になりかねないのである。ここはやはり意識にせざるを得ないだろう。例えば「エルケはすごい。算数で「1」を貰ったよ」とでもしたらいかがだろうか。
- 11) (14) (15) (16)の何れにおいても邦訳に「あの」が付されていることに注意しよう。(15)においては「あの」を付けることは注(9)で述べたように拙いが、狙いは理解できる。淵田氏の言う「ふつうの『あの』」はあるものがわれわれの意識の間近かに迫っているときに用いられるのである。
- 12) Schulz・Griesbach(1982): S.174
- 13) (6)はひょっとして次の例に触れた後であつたらより容易に理解できたかもしれない:  
Welche Blumen gefallen dir? Jene dort.  
これは Langenscheidt の Der Große Muret-Sanders からの例である。二種類の花があり、どちらの花が気に入ったか、と聞かれたので目の前のものではなく、その向こうにあるほうの花が気に入った、と答えているのである。
- 14) Schulz・Griesbach も同じことを述べている。Schulz・Griesbach(1982): S.174
- 15) 注9)参照。

16) ここでは——(24)も同じである—— hier や dort は附置されえない。

17) Oxfordは(22)の直前に次の例を挙げている：

Wir haben zwei Schreibmaschinen, möchten Sie diese oder jene?

これはタイプライターを買いに店に入った来た客に対して店員の言う言葉と解したらわかりやすい。その店には今のところタイプライターが2台しか置いてない。その2台を前に店員が客に説明しているのである。この場合、どちらのタイプライターが店員に近く感じられているかなどと考える必要はあるまい。そのどちらが欲しいかを客に尋ねていると考えれば宜しい。

18) ここで興味深い例を探り上げてみよう。それは次のものである：

Ich bin eigentlich recht froh, daß ich so oft bei Großmama und Mami schlafe, denn das Schloß ist sehr alt, es ist darinnen mancherlei geschehen, so viele Menschen haben schon hier gewohnt. Früher hingen ihre Bilder, in dem jetzt die Fruchtlinge essen. Mami hat Großmama beredet, die Bilder abnehmen zu lassen.---Großmama wollte zuerst von diesem Plan nichts wissen, aber schließlich meinte sie, vielleicht sei es besser für die Bilder, wenn sie abgekommen würden — die Flüchtlingskinder könnten ihren Unfug damit treiben. Nun stehen die Bilder alle auf dem Speicher an die Wand gelehnt. Nur der Feldhauptmann von Aßlau aus dem Dreißigjährigen Krieg ist hängen geblieben, denn er hat seinen Platz nicht im Saal, sondern im Treppenhaus über dem ersten Absatz. Dieser Feldhauptmann sieht fast so aus wie Onkel Eberhard, obwohl er nicht wie jener lacht, aber man denkt bei ihm trotzdem an einen bösen Hund.

[Le Fort: Die Unschuldigen]

ぼくは本当のところ、おばあさまやママンのすぐ近くで眠れることが非常にうれしい。この館は大へん古くて、今までにいろんな気味のわるいことが起こっているからだ。それほど沢山の人がこの館に住んできたのである。以前その人たちの肖像が、いま避難民たちの食堂になっている大広間にかかっていた。ママンがおばあさまに、これらの肖像をとりはずさせようという相談を持ちかけられた。〈中略〉おばあさまは、最初この計画に耳をかそうともなさなかったが、おしまいには、とりはずした方が肖像のためにもよいかもしい、避難民たちが傷つけたりするといけなから、とお考えになるようになった。そういうわけで、現在これらの肖像は、倉庫のなかの壁に立てかけてある。ただ30年戦役時代のフォ

ン・アスラウ野戦隊長の肖像だけは、もとのままにかけてある。これだけは大広間ではなく、二階へあがる階段の踊り場のところにかかっていたからである。この野戦隊長の顔つきは、ほとんどエーベルハルト叔父さんにそっくりだ。叔父さんのように笑ってはいないが、なんとなしに意地のわるい犬をおもい出してしまうのである。

[前田敬作訳]

この jener について前田敬作氏は次のように注釈している<sup>1)</sup>：

Onkel Eberhard を指す。普通のいい方からすれば dieser であるべきところだが、この場合の意識の場においては Onkel Eberhard の方が「心理的に遠い」ところにあるので、このような少し奇異な使い方をしたもの。dieser と jener の使い方を、このように心理的・意識的な「遠近」によって決定するのは、ル・フォールの文体の1つの特徴である。

「心理的・意識的な『遠近』」という観点から dieser と jener を捉えるという方法に賛成しがたいということは言うまでもない。さて、前田氏は下線の jener について「普通のいい方からすれば dieser であるべきところ」している。前田氏のこの見解は実に興味深く、考察するに値するのである。確かに dieser が期待されるところに jener が現れるということはある。次の例を見られたい：

(1) Ich kenne seine Familie seit langem und schätze die Denkungsart jener Menschen.

私は彼の家族とは前々からの知り合いであの方たちの物の考えかたを高く評価している。

(2) Sie wollte die Verzweifelte aufrichten, aber jene blickte nur ins Leere.

彼女はその絶望に打ちひしがれている女性を起こそうとした。しかしその女性はただ虚空を見つめるのみであった。

(3) Ich hatte das Vergnügen, bei dem Kinde meiner Angebeten ---Da mehr als vierundzwanzig Stunden seit jenem feierlichen Moment hingegangen sind---

私は私を崇拜してくれている女性の子供の洗礼立会人になるという光栄に浴した。……24時間以上がその厳粛な時から過ぎ去ったので……

(1) は本文に触れたようにある独和辞典、(2) は Klappenbach/Steinitz、(3) は Duden の Grammatik (1966) (以下 D-G-1966 と略す) から引用したものである。D-G-1966 は dieser であるべきところに jener が現れることについて



次のようにその理由を述べている<sup>2)</sup>:

「比較的近い」と「比較的遠い」との間の境界の線引は、但し、いつも明確になされるとは限らない。往々に理により適った *dieser* の代わりに *jener* が選ばれる。それはわれわれが心の中でわれわれの指した当のものを遠ざけ、その当のものを明確且つ荘重に過去に組み入れるからである。

この注釈は (3) のみならず (1) (2) にも妥当するものである。D-G-1966がここで言いたいことは、平たく言えば、(1) (2) (3) の *jener* は何れも次の例の *jener* の同類であるということなのである:

(4) Sie besitzt jene Zurückhaltung der Norddeutschen.

彼女には北ドイツ人に見られるあの慎しみ深いところがある。

(5) alle jene, die ich sah

私が見たかの一切のもの

(4) は独和辞典、(5) は Oxford からの引用である。Schulz・Griesbach はこの二つの *jene* を同類とみなしている<sup>3)</sup>。それはほとんど説明を要すまい。*jener* は現在から隔たった時点、正確を期すれば、過去の時点のあるものを指すということは本論で展開した *jener* の論述から容易に導くことができるはずである。*jener* によって指された過去における任意の時点のものは聞き手も知っているのである。(4) を載せている辞典はこの *jene* について「一般に知られているものを指す」としている。

*jener* が聞き手にとっても既知であるものを指す、*jener* がこのような働きをするものであるとすれば *jener* は定冠詞と酷似してはいないか。関口氏の定義によれば「定冠詞の機能は、その次に置かれた名詞の表示する概念が、何らかの意味において既知と前提されてよろしいということを暗示することにある」ということである<sup>4)</sup>。*jener* をこのように見てくると *jener* が「定冠詞類」と呼ばれる所以もわかる。同時に *jener* は「定冠詞の強められたもの」であるとする Duden の *Stilwörterbuch* の注釈が理解できる。

*dieser* の代わりに *jener* が用いられる根拠について *dieser* の指すものが「過去に組みいられる」とする D-G-1966 の注釈はこのように説明される。(4) (5) (6) において仮に *dieser* を「この」、*jener* を「その」として両方の訳を並べたら、D-G-1966が行っている注釈はより理解しやすくなるかも知れない:

(4) 私は彼の一家とは前々からの知り合いでこの (その) 方たちの物の考えかたを高く評価している<sup>5)</sup>。

(5) 彼女はその絶望に打ちひしがれている女性を起こそうとした。しかしこ

の(その)女性はまだ虚空を見つめるのみであった。

(6) 私は私を崇拜してくれている女性の子供の洗礼立会人になるという光栄に浴した。24時間以上がこの(その)厳粛な時から過ぎ去ったのでル・フォールの例に戻ろう。前田氏の言うようにここで「普通の言いかたからすれば dieser であるべきところ」としよう。そして仮に問題の個所を dieser で以て書き換えてみよう:

Dieser Feldhauptmann sieht fast so aus wie Onkel Eberhard, obwohl er nicht wie dieser.

dieser は「意識と関心に近い」ものを指すのである。近くに感ずるものを指すのである。この位置にある dieser に Onkel Eberhard は果たして近くに感じられるであろうか。それよりはむしろ原文の jener のままであるほうが良いように思われる。そしてその根拠はD-G-1966に拠ればよいのではないだろうか。

(4)(5)(6)よりは jener が用いられている根拠はより容易に説明できるように思われる。

補注1) 前田敬作(1966): 65頁

補注2) Duden(1966): S.261-262

補注3) Schulz・Griesbach: S.174

補注4) 関口存男(1976): 1頁

補注5) (1)で示したような独和辞典に付されている「『あの』方たちの物の考えかた」という訳には賛成しかねる。

- 19) dieser と jener がともに話者の「意識と関心に近い」ものを指すということは Bedeutungswörterbuch の次の注釈にも窺える:

dieser sinnv.: der [da/dort], jener

jener sinnv.: der, dieser

後者については、既に言及したように、Der große Duden が同じことを述べている。しかし Der große Duden は不思議なことに前者のことに触れていない。Bedeutungswörterbuch の注釈を以て dieser と jener は互いに完全に同義語であると言えるのである。

ただ Bedeutungswörterbuch が挙げている jener の例文から上の注釈の意味を読みとるのは難しいかも知れない。例文は次のようなものである:

(1) die Anschauungen jener finsternen Zeiten

(2) ein Spaziergang zu jener Bank

(1)は「あの暗黒時代観」ということで jener は注(17)で言及したものである。

jener が定冠詞の der と同義語であることは論をまたない。そして jener がまた dieser の同義語でもあるということも「あの暗黒時代」がここでは「意識と関心に近い」のであるから納得しうる。では(2)の jener はどのように解釈したらよいであろうか。ここでは jene Bank の前提となる diese Bank なるものが考えられているのであろうか。そんなことはあるまい。dieser を前提とすることによって jener はその存在を主張することができるわけだが、それは何も dieser の存在を常に意識しなければならないということにはならない。jener は dieser をまさしく前提とすることによって「少し隔たりのある」という意味を獲得してきたのである。jene Bank は単独で「ある距離を感じさせるところにある銀行」なのだ。正に単独で考えられる銀行であるが故にここの jener は dieser であり、定冠詞の der と同義語であるのである。「あの(少し距離のある)銀行まで散歩がてらに行ってくること」とでも訳せるであろう。

- 20) (26) (27) を評して Schulz・Griesbach が「不特定の瑣末なもの」と言っているのも理解できるであろう。Schulz・Griesbach (1982): S.174
- 21) dieser は近くの人、または、あるものを「強く」指すとする Kempcke と Der große Duden が揃って jener の定義に際してはこの「強く」という語(Kempcke は ausdrücklich, Der große Duden は nachdrücklich を充当している)を用いていないことに注目しよう。jener がある人、または、あるものを dieser と同様に「強く」指すとすれば、jener は完全に dieser と一致し、その存在が考えられなくなってしまうと考えてのことと思われる。他方 Bedeutungswörterbuch は、Kempcke や Der große Duden と異なって、jener を定義するにあたって dieser と同じように「強く」(ausdrücklich)という語を用いている。しかしこれは注18)で述べたところの「jener は『定冠詞の強められたもの』である」ということと同じことを言っているのだと考えられる。
- 22) 注18) 参照。dieser の代わりに用いられる jener には「その」を当てたほうがよいかも知れない。当該の個所の(4)(5)(6)にて対比形で挙げられている「この」と「その」という訳語を比較されたい。

#### 〔参考文献〕

- 関口存男(1936) ドイツ語講座 第四巻 改訂第三版 外語研究社  
関口存男(1966) ドイツ語学講話 第一集 第四版 三修社  
関口存男(1976) 冠詞 第一巻 定冠詞篇 第三版 三修社  
澁田一雄(1978) ドイツ語中級文法の要点 第三版 大学書林

前田敬作 (1966) 前田敬作編 ル・フォール『無辜の子供ら』 南江堂

Duden Grammatik (1966) Bibliographisches Institut AG

Duden Grammatik (1984) Bibliographisches Institut AG

Schulz・Griesbach (1982) Grammatik der deutschen Sprache 11 Aufl. Max Hueber